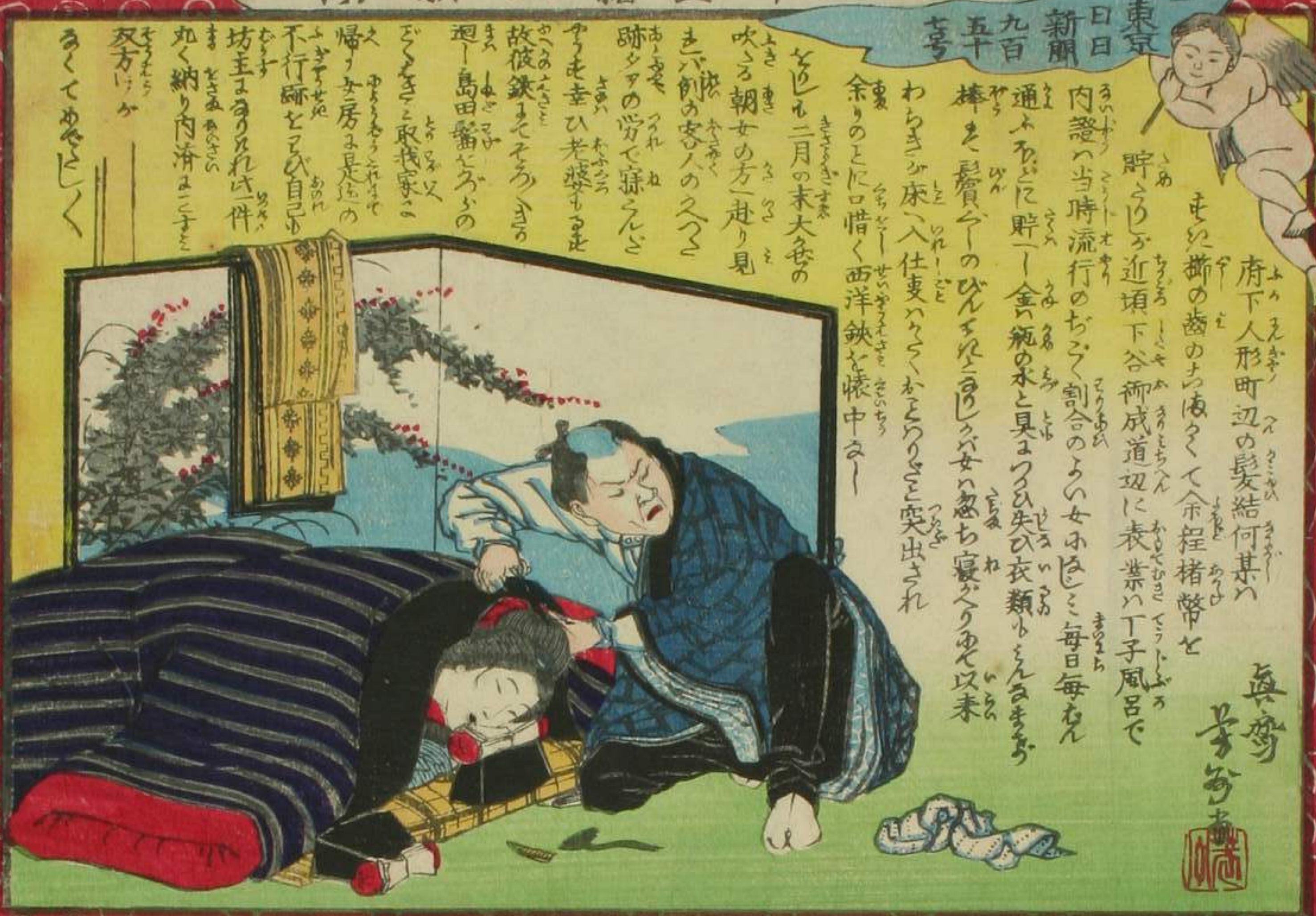


大日本國繪入新聞 第十号



あつてめんどく
 双方い
 丸く納り内済は二と
 坊主よりなれば二件
 不行跡とて自己
 帰る女房は是迄の
 女は三月の末大巻の
 吹る朝女の方走り見
 まは朝の客の又つ
 跡のつて跡と
 幸ひ老翁するは
 故彼鉄とそつ
 廻一島田齋とろの
 取捨
 女房は是迄の
 不行跡とて自己
 坊主よりなれば二件
 不行跡とて自己
 坊主よりなれば二件

府下人形町辺の髪結何某の
 まは朝の客の又つ
 跡のつて跡と
 幸ひ老翁するは
 故彼鉄とそつ
 廻一島田齋とろの
 取捨
 女房は是迄の
 不行跡とて自己
 坊主よりなれば二件
 不行跡とて自己
 坊主よりなれば二件

東京
 新報
 九百
 五日
 内證の當時流行のちとく割合のよの女は毎日毎
 通ふに時一金瓶の水と見まつひ衣類ももんま
 棒を髪へのひんては女は寝て寝て寝て寝て寝て
 わらさ床へ入仕使はくかたのりと突出され
 余の口に惜く西洋鉄と懐中
 女は三月の末大巻の
 吹る朝女の方走り見
 まは朝の客の又つ
 跡のつて跡と
 幸ひ老翁するは
 故彼鉄とそつ
 廻一島田齋とろの
 取捨
 女房は是迄の
 不行跡とて自己
 坊主よりなれば二件
 不行跡とて自己
 坊主よりなれば二件



東京
 新報
 九百
 五日
 柄懸士族藤牧光輝の伴貞甫に家督とゆぐり
 居て東京一出たろ町に宿をとりて居るに
 赤町小田川善右門の妻おきんと折、面會
 娘おきと藤牧加藤實明弟何某(幸とまり
 ちとまり)の昨年十二月十六日如藤氏の
 本おむき僕小田川善右門の
 本おむき僕小田川善右門の
 本おむき僕小田川善右門の

人のむすめと妾とを
 あつてめんどく
 双方い
 丸く納り内済は二と
 坊主よりなれば二件
 不行跡とて自己
 帰る女房は是迄の
 女は三月の末大巻の
 吹る朝女の方走り見
 まは朝の客の又つ
 跡のつて跡と
 幸ひ老翁するは
 故彼鉄とそつ
 廻一島田齋とろの
 取捨
 女房は是迄の
 不行跡とて自己
 坊主よりなれば二件
 不行跡とて自己
 坊主よりなれば二件

二十年の
 處せられ
 一とを

西洋
 重入形町上州屋板

大日本國繪入新聞 第十号

東京 日日新聞 九百五十五号



府下人形町辺の髮結何某の
 まは擲の齒のたゆみて余程楮幣を
 貯りて近頃下谷柳成道辺に表業の丁子風呂で
 内證の當時流行のぢぢ割合のよの女小ぼと毎日毎ん
 通ふるどに貯り金瓶の水と臭つる以失衣類もとんまふ
 棒を髪鬚のびんをとりしる女い忽ち寝るゆゑ以来
 わらきか床へ入仕度へくかどりのこと突出され
 余りのとに口惜く西洋鉄を懐中なり

真野 号 号 号 号

まは二月の末大各の
 吹くる朝女の方一赴り見
 まは朝の客人のえつこ
 跡夕の勞で寐こんど
 幸ひ老婆もるま
 故彼鉄もそらさる
 廻り島田鬻とらふの
 取我家
 久し女房は是迄の
 不行跡を己び自己
 坊主よりなれば一件
 丸く納り内済よこす
 双方けか
 るくてゆゑにしく



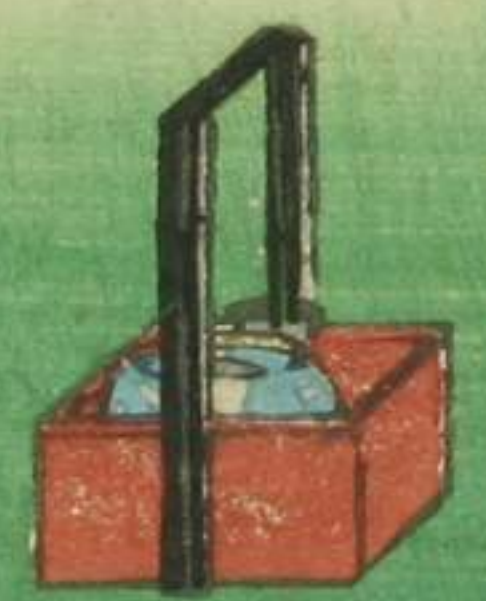
東 京 日 新 報 五 百 五 十 八 号



西洋書



正柄縣士族藤牧光輝の倅貞甫に家督とゆづり
 隠居して東京へ出たが町に宿をとりて居るに
 葉町の小田川善右門が妻おきんと折、面會し
 その娘おはげが華族加藤實明弟何某(妾とまり
 居る)をきかぢり昨年十二月十六日加藤氏の
 方よりおむき僕小田川善右門より
 頼まき参りたるものなりその次第
 一人のむすめを妾と差し
 おいふ跡目相續の智養子
 小田川一家を引とり下さる何れもは相おさ
 されと談ト々ね加藤氏のうにても此やうなめが
 表ざらてい如何なりと段々分合二百圓を手打
 ころりしか此頃其悪妻か
 案々いよ除族のえ



十年の
懲役ま
處せられ
しとを

重入形町上洲屋板

若きとき